

<コラム>

# エイムズ唯子の「心理学の周辺」



—昨年のお夫の誕生日に植えた  
「トロピカルシャーベット」

## 第7回：「バラの記憶」の巻

10年ほど前のこと、「暮しの手帖」の「すてきなあなたに」のページで、バラを育てる人の話を read したのです。「バラを育てて咲かせるのは難しいように思われているけれど、虫がついても、放っておいても、意外と強くてね、花をつけたりするものなのよ」。思えばそのころ、研究も先が見えず、プライベートも八方ふさがりで、クサっていたんです。私だっていつか花を咲かせたい、という思いがあったのでしょうか。気難しく、繊細そうなバラの意外なしぶとさ、たくましが心に残り、いつかバラを育ててみたいと思うようになりました。思いがなくて、自分で庭にバラを植えるようになってからは、初夏の光のなかの輝くばかりの美しさだけでなく、木枯らしにさらされた風の子のほっぺたのような、秋バラの深い色合いや、赤い実の可憐さも知るようになりました。この200年ほどの交雑によって何千という種類のバラが生まれ、愛されています。それぞれ色やかたち、大きさ、香り、耐病性など、姿も性質もさまざま。まるで人間のようです。

映画のなかのバラにまつわるシーンも気になります。「西の魔女が死んだ」という映画では、学校へ行けなくなった中学生の少女が、大好きなイギリス人のおばあちゃんの田舎の家でひと夏を過ごしますが、おばあちゃんの庭にもバラがありました。「マイ、来てごらん。これはなんでしょう？ニクニクよ。バラのそばに植えておくと、虫がつかないし、香りもよくなるんです」。可憐で無垢なバラそのもののようなマイは、ゲンジという隣家の中年男を忌み嫌います。おばあちゃんはマイというバラに、クサいけれど、滋養たっぷりのにんにくと共に生きる術を学び、健やかに豊かに生きてほしい、と切に願いますが、その思いが通じたとき、西の魔女であるおばあちゃんは、帰らぬ人になっているのです。

「余命一ヶ月の花嫁」は、ゼミの3年生が「愛と犠牲」というテーマにそって選んだ映画。ちまたでの評判は、決して芳しいとは言いがたいこの作品を教材にするのは少々勇気が要りましたが、思いがけない収穫がありました。冒頭のシーンで流れるのは「The Rose」のカバー。ベット・ミドラーがジャニス・ジョップリンを演じた映画の主題歌がオリジナルですが、その歌詞を初めて知りました。「もし夜がさみしすぎて、道が遠すぎて、幸運で強い人間にしか愛を手に入れることはできないと思うようなとき、思い出して。冬の冷たい雪の下で太陽の愛を受けたバラは、春に花咲くということを」。

昨年秋には、特別なバラとの出会いがありました。ある方が語ってくださったそのバラは、私がおそらく見ることはないバラです。そのバラは、福島県の浪江市の一角に咲く、赤いつるバラです。ふるさとの庭に、家族の記念に植えられたそのバラは、もう何十回となく、春に、秋に、花をたわわにつけたそうです。今は深い雪のなかで、はじめてひとりで冬を迎えていることでしょうか。そして春が来たなら、静かすぎる家の庭で、そのバラは咲くことでしょうか。私の知る限り、最も誇り高く美しいバラです。どうか今この時も、あなたが太陽の愛を一身に受けていますように。



夫の母もバラ作りが大好き

(高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者)